

## クーパー的瞬間：

*The Last of the Mohicans*におけるアメリカの共和主義

森 本 奈 理

### The Cooperian Moment:

American Republicanism in *The Last of the Mohicans*

MORIMOTO, Nari

This essay examines “American” republicanism in *The Last of the Mohicans*, one of the most important literary works of James Fenimore Cooper. The Cooperian moment is an extremely short time when the text discloses the doubleness of American republicanism. What the doubleness means is the “in-betweenness” which Americans had to assume when they were establishing their own republic; they were forced to choose between European civilization and American wilderness. At first, American republicanism tried to keep a long distance from the former, which was inevitably polluted with governmental corruption, and return to the state of nature seen in the latter. It looked completely free from such corruption. However, in the end, Americans had to identify themselves with Europeans—and fashion themselves as civilized—to the extent that they could keep the “color line” between white Americans and Native ones.

この論考では、タイトルに示した通り、ジェイムズ・フェニモア・クーパーの代表作*The Last of the Mohicans*（以下、『モヒカン族の最後』と呼ぶ）をアメリカの共和主義の観点から解釈したいと思う。本論の概略としては、このテキストを読み解く際に注目すべきことはアメリカの共和主義が反ヨーロッパ的な自然状態への回帰志向を有するために、ヨーロッパ人の植民以前からアメリカ大陸に存在したネイティブ・アメリカン（以下、小説での表記に合わせて「インディアン」と呼ぶ）の部族社会（いわゆる「自然状態」）に似ていたが、それでは白人とインディアンの「カラー・ライン（人種的差異）」を維持できなくなるので、結局ヨーロッパの理論的伝統に少々依存しなけりなかつたという重層性である。クーパーの『モヒカン族の最後』はフレンチ・インディアン戦争を背景にした単なる冒険活劇ではなく、「レザーストックング連作」の前作『開拓者たち *The Pioneers*』に匹敵する政治小説なのである。<sup>1</sup>より正確に言えば、『モヒカン族の最後』は前作では無視されていた問題、主人公ナッター・バンポーとインディアンの人種的差異という微妙な問題を扱っているということである。

まず、アメリカの共和主義を定義することから議論を始めたい。これはクーパーが小説の舞台に設定する18世紀半ば以降のアメリカ建国期に盛んに討議された統治論で、「これからアメリカはどのような国家になる必要があるのか」という問いへの答えであった。アメリカ人がイギリスから独立するにあたって、自分たちの国家像を定めなければならなかつたが、手っ取り早くイギリスの政治制度をそのまま導入するのであれば、そもそもイギリスから独立した意味がなくなる。むしろ、一部のアメリカ人はイギリスを始めヨーロッパ諸国の政治制度こそが腐敗しているので、そこからできるだけ距離をとらなければいけないと考えたが、彼らがヨーロッパの中央集権システムの代替物になり得ると捉えたのが

古典的な共和主義政体だった。

ここで重要なのはアメリカが当時のヘゲモニー国家イギリスに背を向けたことである。イギリスは他国からすれば「進歩」のモデル、未来を約束された経済大国だったのだが、アメリカは自主的に進歩の流れから足を洗ったのだった。アメリカのこの「奇妙な経歴 strange career」について、ポーコックは以下のように述べている。

[...] but the analysis of corruption makes it clear that what was involved was a flight from modernity and a future no less than from antiquity and a past, from commercial and Whiggish Britain—the most aggressively “modern” society of the mid-eighteenth century—no less than from feudal and popish Europe [...]. (Pocock 546)

腐敗を分析すれば、要点は古代性や過去からの逃避だけでなく近代性や未来からの逃避でもあったこと、封建的でカトリック的なヨーロッパからの逃避だけではなく、商業的でウィッグ的なイギリス、すなわち 18 世紀半ばの最強の近代国家からの逃避でもあったことが分かる。

むしろ、ここで示されている通り、アメリカは政治的腐敗への抵抗感からイギリスのシステムを採用しなかったのだが、そのせいもあってか、当時のヨーロッパの知識人は「アメリカでは人間が退化する」というアメリカ退化論を信じていた。<sup>2</sup>

それでは、アメリカ人が進歩を犠牲にしてまで嫌った政治的腐敗とは一体何なのだろうか。これは政治家が公共善のためではなく私利私欲の

ために活動することを指している。そして、金銭のやり取りが不可避な「商業」が発展するにつれ、腐敗した政治家も目立つようになる。イギリスのような成熟した近代国家の基礎は国内外からの様々な脅威に対抗できる官僚制と常備軍の2つだが、これらは政治担当の専門家、軍事担当の専門家を必然的に生むことになる。こうした専門分化は本来の人間のあり方ではないというのが古典的な共和主義の主張なのである。この主張に従えば、平時には土地を耕し日々の糧を得ながら政治に参加し、戦時には兵士として祖国を防衛する「徹底したアマチュアリズム」とでも言うべきものが人間の自然な状態だということである。<sup>3</sup>要するに、こうした生き方をすれば、他人に依存する必要がなくなり、他人に依存しなければ、公共善の実現に必要な個人の「徳 virtue」が最大限に担保される、というわけである。それとは反対に、専門分化すれば、生産者や政治家、軍人の業務に金銭的な報酬を支払わなければいけなくなり、社会全体がますます金銭に支配されることになる。商業の発展と職業の専門化が進めば進むほど、人間は自然な生き方から疎外されるのだ。

己の踏みしめる大地から日々の糧を得つつ、政治にも軍事にも常にかかわる。こうした共和主義の理想を体現しているのがナッティーや彼の周りにいるインディアンたちである。彼らは皆、平時には森の中で狩猟を行い戦時には戦士として自分の土地を防衛する。『モヒカン族の最後』の終盤では、デラウェア族の1支族にすぎないモヒカン族の末裔アンカスがデラウェア族の協議会で政治家ばりの雄弁を披露し、デラウェア族とヒューロン族の戦いが決定される。ナッティーやアンカスの「敵」ヒューロン族のマグワにしてもそうである。マグワは徳には欠けるものの、優秀な戦士かつ優秀な政治家である。彼は一度はヒューロン族を追放された身分でありながら、得意の雄弁を用いて戦時の酋長の座におさまるのである。

The orator, or the politician, who can produce such a state of things, is commonly popular with his contemporaries, however he may be treated by posterity. All perceived that more was meant than was uttered, and each one believed that the hidden meaning was precisely such as his own faculties enabled him to understand, or his own wishes led him to anticipate. (319)

雄弁家、すなわち政治家はこういう状態を作り出せるので、後世からの評価はともかく、同時代人には概ね人気があるのだ。聴衆はみな、マグワの発言には含みがあり、その含みは自分の理性によって悟ったこと、自分の感性によって欲したこととぴったり一致していると思っ込んだ。

むろん、マグワも平時には狩猟を行い、あまりにも大きい獲物を仕留めた際には運搬のために若いインディアン「曲がる葦 Reed-that-bends」の助力を求めて村に戻ってくる。だが、この直前に、「曲がる葦」は戦時には必ず敵前逃亡を図り、戦士としての貢献をしていないことを理由に粛清、殺害されていたのだった。「曲がる葦」は平時にいくら役立つとも戦時に役立たない以上、インディアンの社会に生きる資格はないのである。

このように、共和国の成員が食糧生産だけでなく政治にも軍事にも「平等」にかかわらなければアメリカ的な「自由」は確保できないという点で、ベンジャミン・フランクリンやトマス・ジェファソンらが推進した共和主義政体はインディアンの政体に非常に似ていたのだった。例えば、ジェファソンはアメリカ退化論に反論するために執筆した

『ヴァージニア覚え書』の中で、インディアンの政体を好意的に評価している。

Imperfect as this species of coercion may seem, crimes are very rare among them: insomuch that were it made a question, whether no law, as among the savage Americans, or too much law, as among the civilized Europeans, submits man to the greatest evil, one who has seen both conditions of existence would pronounce it to be the last: and that the sheep are happier of themselves, than under care of the wolves. (Jefferson 220)

この種の強制が不完全に見えようとも、インディアンの社会に犯罪は非常に稀である。アメリカの未開社会のように全く法律がない状態、ヨーロッパの文明社会のように法律が多すぎる状態のいずれが人を最悪の犯罪に追いやるのかを問い質してみよう。両方の生活様式を見聞した人ならば、後者だと答えるだろう。羊は狼の管理下にあるよりも自分たちだけで生活するほうが幸せなのだ。

「人民（羊）」を管理する技術としての「法律（狼）」が少なければ少ないほど、人民は自律的な生活を送ることができる以上、法律は多いよりも少ないほうがよい。従って、法律の全くないインディアンの政体は法律が多すぎるヨーロッパ諸国の政体よりも優れていることになる。

クーバーも共和主義政体とインディアンの政体の共通性を知悉していたので、『開拓者たち』の第7章では以下のように述べている。

But, in a government, so peculiarly republican as the Indian polity,

it was not, at all times, an easy task, to restrain its members within the rules of the nation. [. . .] To the hut of the old hunter, he [Chingachgook] seemed peculiarly welcome; and, as the habits of the “Leather-stocking,” were so nearly assimilated to those of the savages, the conjunction of their interests excited no surprise. They resided in the same cabin, ate of the same food, and were chiefly occupied in the same pursuits. (*Pioneers* 84-85)

だが、インディアン の 政 体 と 同 様、 奇 妙 に 共 和 主 義 的 な 政 府 に お い て、 国 家 の 取 り 決 め を 全 構 成 員 に 強 制 す る の は 生 易 し い こ と と は 限 ら な か っ た。( 中 略 ) チ ン ガ チ グ ッ ク は 老 齡 の 獵 師 の 小 屋 に 奇 妙 に 歓 迎 さ れ た よ う だ っ た。 そ し て、「 レ ザ ー ・ ス ト ッ キ ン グ 」 の 生 活 習 慣 は イ ン デ ィ ア ン と ほ ぼ 同 じ だ っ た の で、 彼 ら の 利 害 の 一 致 は 驚 く べ き こ と で は な か っ た。 彼 ら は 同 じ 屋 根 の 下 に 住 み、 同 じ 釜 の 飯 を 食 い、 だ い た い は 同 じ 仕 事 を し た。

こ こ で ク ー パ ー は イ ン デ ィ ア ン の 政 体 が 共 和 主 義 的 で あ る こ と、 そ う し た 共 同 体 で は 個 々 の 構 成 員 が 自 律 し て い る の で 法 律 の 強 制 力 も 働 き に く い こ と を 認 め て い る。 そ し て、 ク ー パ ー 曰 く、 共 和 主 義 的 な 生 活 を 実 践 す る 白 人 ナ ッ テ ィ ー は イ ン デ ィ ア ン と ほ ぼ 同 じ 生 活 を し て い る た め に、 モ ヒ カ ン 族 の 酋 長 チ ン ガ チ グ ッ ク を 拒 否 す る ど こ ろ か 共 同 生 活 を 送 っ て い る、 と い う こ と で あ る。 あ ら ゆ る 面 で の ナ ッ テ ィ ー と チ ン ガ チ グ ッ ク の 距 離 の 近 さ は こ の テ ク ス ト 内 で は 終 始 一 貫 し て い る。

さ ら に 興 味 深 い の は こ の 直 後 の オ リ ヴ ァ ー ・ エ ド ワ ー ズ の 傷 治 療 の 記 述 で あ る。 チ ン ガ チ グ ッ ク は イ ン デ ィ ア ン の 流 儀 に 従 っ て オ リ ヴ ァ ー の 銃 創 に 薬 草 を 塗 布 す る が、 そ の 場 に 居 合 わ せ た 白 人 医 師 ト ッ ド は そ の 薬

草の一部をこっそり盗み、その窃盗の瞬間を見ていたテンプル判事にインディアンの医術の利点を囁く。

“It is not to be denied, Judge Temple, but what the savages are knowing, in small matters of physic. They hand these things down in their traditions. Now, in cancers, and hydrophoby, they are quite ingenous. I will just take this bark home, and analyze it; for, though it can't be worth sixpence to the young man's shoulder, it may be good for the tooth-ache, or rhoomatis, or some of them complaints. A man should never be above larning, even if it be from an Indian.” (*Pioneers* 89)

テンプル判事、些細な医術についてのインディアンの知識を否定することはできないよ。奴らはこういうことを代々受け継いでいるからね。実際、奴らは癌や狂犬病についてかなり詳しいんだ。俺はこの樹皮を持ち帰って分析してみるよ。こいつは若者の肩の治療には役に立たないだろうが、歯痛やリウマチなどには効くだろうからね。人は学びを恥じるべきではないよ。たとえそれがインディアンからであろうとね。

トッド医師によれば、野蛮人とされるインディアンからでも医学的に学ぶべきことは存在するということであり、彼は実際にこの薬草の効能を応用し出世していくのである。この「インディアンからでも学ぶべきことはある」という命題は医学に限ったことではなく、アメリカの統治理論にも当てはまるのではないだろうか。アメリカ人が共和主義思想を練り上げていく際に、近くにいたインディアンの政体を参考



にしたという推測はあまりにもうがった見方だと切り捨ててしまってもよいのだろうか。<sup>4</sup>

そして、ナッティーやインディアンが共和主義的な「独立自営農民」のロマンを強く体現すればするほど、それとは対照的なヨーロッパ由来の人や物は腐敗のイメージで描かれる。まず、『モヒカン族の最後』の背景になっているフレンチ・インディアン戦争だが、これはヨーロッパ列強間の領土紛争を植民地時代のアメリカに持ち込んだもので、私利私欲に駆られたヨーロッパの絶対君主の腐敗を象徴している。

[. . .] there was no recess of the woods so dark, nor any secret place so lovely, that it might claim exemption from the inroads of those who had pledged their blood to satiate their vengeance, or to uphold the cold and selfish policy of the distant monarchs of Europe. (15)

己の復讐心を満足させたり、遠く離れたヨーロッパの国王の冷淡で利己的な政策を遂行したりしようとする人々の侵略を免れるほど鬱蒼とした森の奥地や人跡未踏の良い土地はなかった。

同時に、こうした侵略戦争を可能にする常備軍の職業的軍人も腐敗しており、作中ではほぼ「道化」のように描かれている。上官マンロー大佐の娘2人コーラとアリスを護衛するイギリス軍将校ダンカン・ヘイワードは悪党マグワを道案内人に選定したり、夜間に見張りをするつもりでいてあっさりと睡魔に負けてしまったりと数々の失敗を犯し、軍人としての貢献ができない。また、彼はナッティーやマグワに金銭的な報酬を提案し、すげなく断られている。マンロー大佐も敵のフランス軍に降伏

して以降、急に老け込み、娘2人の捜索に同行するものの、道中を通じて全く存在感がない。フランスの将軍モンカルムも、ヒューロン族による「ウィリアム・ヘンリー砦の虐殺」をやめさせられない「徳」の欠如をクーパーに非難されている。実際、モンカルムはこの「徳」の欠如のせいで「運命」に翻弄され、後に戦死する。この文脈での「徳」は自由意志に等しく、これと「運命」の関係は反比例になっている。

さらに、敬虔な賛美歌手デーヴィッド・ガマットはナッティーやインディアンに道化として扱われているが、不器用で讚美歌を歌ってばかりいる彼と現実主義者ナッティーの違いは以下のように表現される。

Book! what have such as I, who am a warrior of the wilderness, though a man without a cross, to do with books? I never read but in one, and the words that are written there are too simple and too plain to need much schooling [ . . . ]. 'Tis open before your eyes [ . . . ]. (134)

本だと！ 俺のような荒野の戦士—ただし、混血人種ではないぞ—と本の間でどういう関係があるのだ？ 俺はこれまでに1冊しか本を読んだことがないが、そこに書かれた言葉は簡潔で平明だったので、あまり知識を必要としなかった。(中略) その本とはお前の目の前にも開かれているものだ。

このように、アメリカの荒野では宗教や本や理論といったものは基本的に役に立たない。自然と直接対話し、経験から学ぶことだけが生命維持の必要条件であり、人はそこから逸脱すればするほど腐敗していることになる。

自然やそこに生きる動植物から学ぶ。これはインディアンのトーテム信仰にほぼ等しい行為である。トーテムとは「ある特定の動植物を先祖の生まれ変わりとして崇拝の対象にすること」だとまとめられるが、作中ではデラウェア族のトーテムが「カメ」、ヒューロン族のトーテムが「ヘラジカ」だとされている。さらに、家族や個人の単位でもトーテムが存在し、チンガチグックは「大きなヘビ」、アンカスは「素早いシカ」、マグワは「狡猾なキツネ Le Renard Subtil」という動物にちなんだ別名を持っている。白人のナッティーもインディアンの風習に倣っているのだろうか、「タカ目 Hawk-eye」と呼ばれている。(アメリカの国璽にはハクトウワシが描かれているが、その原案には、皮脚絆を履いたインディアンという構図もあった。)

ここまで見てきたように、『モヒカン族の最後』はデラウェア族とヒューロン族というインディアンの部族間の争いを中心に据える「インディアンの物語」、あるいは「トーテム的物語」だと言えるのかもしれない。実際に、クーバーの伝記作家ウェイン・フランクリンはこの小説における人間と動物の類似性を指摘している。

For instance, the facility with which Cooper's human characters merge with natural creatures—or “totems,” to use a word that in fact was central to Cooper's understanding of Indian sociopoetic organization—suggests that he was self-consciously seeking to model this first of his “Indian” tales on the mental habits of the Native Americans, not just on the outward plot of their history. It is not claiming too much to assert that his sixth novel has a totemic principle at its core. (Franklin 474)

例えば、クーパーの登場人物が自然物（クーパーがインディアンの社会文化的組織を理解するのに不可欠だった言い方をすれば「トーテム」であるが）に容易く同化することからすれば、クーパーはインディアンの歴史の表層だけではなく、彼らの内面にも基づいて自身のインディアン連作の第1作を意識的に構築しようとしていたのが分かる。彼の第6作はトーテムの原理を内在させていると言っても言い過ぎではない。

クーパーがインディアンの物語を重層的に構築しようと心がけ、かつそれに成功しているという意味では、ウェイン・フランクリンの解釈は正しい。ただ、それだけでは、この物語のポテンシャルを十全に語り尽くしたことはない。クーパーが動物表象に長けていることだけを理由にこの小説がインディアンの物語、トーテム的物語だと断定すれば、なぜナッティーが再三に渡って「自分はインディアンに見えるかもしれないが、れっきとした白人である」とカラー・ラインを強調しているのかという重要な問いに答えられないだろう。確かに、クーパーはこの小説の中で頻繁に動物を引き合いに出しているが、その全てがトーテムと紐づける形で書かれているのではないことに注意すべきである。

このことを証明するにあたっては、古典的共和主義理論、16世紀のイタリアの政治哲学者マキアヴェッリの『君主論』を紐解く必要がある。「共和国の構成員はキツネの狡猾さとライオンの勇敢さを併せ持たなければいけない」という動物表象のくだりはこの政治的著作の中でも特に有名な記述である。

したがって、君主には獣を上手に使いこなす必要がある以上、なかでも、狐と獅子を範とすべきである。なぜならば、獅子は畏から身

を守れず、狐は狼から身を守れないがゆえに。したがって、狐と  
なって罫を悟る必要があり、獅子となって狼を驚かす必要がある。  
(中略)したがって、君主たる者に必要なのは、先に列挙した資質  
のすべてを現実に備えていることではなくて、それらを身につけて  
いるかのように見せかけることだ。(マキアヴェッリ 132-33)

この引用で注意しなければならないのは、文の主語を「共和国の市民」  
に置き換えても筋が通ることである。<sup>5</sup>先程から述べているように、共  
和国の市民は平時には議員として狡猾なキツネのように政治にかかわり、  
戦時には民兵として勇敢なライオンのように軍事にかかわらなければい  
けないからである。

マキアヴェッリが『君主論』の中で「キツネ」や「ライオン」と言う  
場合、彼はインディアンのとてむのこを念頭に置いているのではなく、  
比喩という我々にも馴染み深いレトリック、ヨーロッパの伝統が  
培ってきたレトリックを用いているにすぎない。そして、クーバーが  
『モヒカン族の最後』の中で「キツネ」や「ライオン」と言う場合、彼  
はとてむの存在を認識しつつもレトリックを用いているにすぎないの  
だ。というのは、「キツネ」はともかくとして、「ライオン」はアメリカ  
大陸にはいない以上、インディアンのとてむにも「ライオン」は出て  
こないはずだからだ。<sup>6</sup>そこで、『モヒカン族の最後』の中で「ライオン」  
という語がどのように使われているのかを調べると、この語は7回出現  
する。そして、7回全てが「地の文」で使われているが、そのうち3回  
はシェークスピアから引用されたエピソードの中に出てきている。書物  
を読まないナッティーやインディアンがアメリカにはいない「ライオ  
ン」に言及すれば、小説のリアルさは台無しだったはずだが、そういう  
ケアレスミスはクーバーには無縁だったようだ。

ヨーロッパの学識をナッティーに押し付け彼をインディアンに優越させるのはさすがに不自然だと判断したクーパーは、言葉ではなく行動でカラー・ラインを確認するプロットを思いつく。これは第22章から始まるアリス救出作戦だが、ここから物語の色調は一変する。ここまで受身で道化同然だった白人ヘイワードとガマットが突然存在感を示し始めるのだ。まずは、ヘイワードがフランス人の呪術師に変装し、アリスが幽閉されているヒューロン族の村に忍び込む。(ヘイワードはフランス語を話せるが、インディアン語は話せないので、インディアンのふりをすることはできない。)

In short, he entirely sacrificed every appearance of the warrior to the masquerade of a buffoon. Such exhibitions were not uncommon among the Indians; and as Duncan was already sufficiently disguised in his dress, there certainly did exist some reason for believing, that with his knowledge of French, he might pass for a juggler from Ticonderoga, straggling among the allied and friendly tribes. (260)

つまり、彼は兵士としての装備を全て外し、道化のふりをしたのだ。こういう装いはインディアンの社会ではよくあった。ダンカンはずでに十分に道化らしく変装していたが、彼はフランス語の知識を活かし、同盟のインディアン部族を巡回するタイコンデロガ砦の奇術師にパッシングするのがよからうということになった。

皮肉なことに、職業的軍人の格好をしていたときには道化だったヘイワードは道化に変装した途端、主体性を発揮し始める。ガマットもイン

ディアンから道化だと見なされ、村への出入りを黙認されていることを逆手にとってハイワードをサポートする。

一方、ナッティーとアンカスはマグワがデラウェア族に預けたコーラの救出に向かうが、道中でヒューロン族と遭遇する。アンカスは彼らを深追いするうちに生け捕りにされ、彼らの村へと連れ去られる。そして、ナッティーがアンカスの救出に向かう第26章が『モヒカン族の最後』のクライマックスである。この章は「ライオンの役をさせてくれ Let me play the lion too.」というシェークスピアの『夏の夜の夢 *A Midsummer Night's Dream*』から引用されたエピソードで始まるが、ナッティーはクマに変装しヒューロン族の村に潜入する(303)。クーバーはナッティーをライオンに変装させたかったのだろうが、ライオンのいない世界でライオンに変装するのはさすがに不自然である。クマに変装したナッティーはハイワードのアリス救出を助けた後、ヒューロン族の村に独りで引き返し、そこにいたガマットを引き連れ、アンカスが捕らわれている小屋に向かう。そして、ナッティーはアンカスの救出のために変装作戦を案出する。

‘Now, friend,’ said Hawk-eye, addressing David, ‘an exchange of garments will be a great convenience to you, inasmuch as you are but little accustomed to the make-shifts of the wilderness. Here, take my hunting shirt and cap, and give me your blanket and hat. You must trust me with the book and spectacles, as well as the tooter, too [...].’ (309)

「それはそうと、俺と服装を変えておけば、お前にもご利益があるだろう。荒野の処世術にはほとんど慣れていないとは思うが。さあ、

俺の狩猟服と帽子を着て、お前の服と帽子を貸してくれ。笛だけでなく聖書も眼鏡も貸してくれ」とホークアイはデーヴィッドに言った。

アンカスを小屋から逃がすにあたって、ナッティーはアンカスをクマに変装させ、自身がガマツトに変装し、来た道を引き返し村の外へと出ようとする。ここで重要なのはナッティーとガマツト、アンカスという三者の変装可否の問題である。小屋から脱出できるのは2人で、その2人が脱出するためにはクマとガマツトに変装する必要がある。まず、クマに変装できるのは荒野での経験が豊富なナッティーとアンカスである。次に、ガマツトに変装できるのはガマツト自身か白人のナッティーである。従って、アンカスを逃がすためにはアンカスがクマに変装するしかない。残るはナッティー、ガマツトのいずれがガマツトに変装するのかという問題である。ナッティーが小屋に残る場合、ガマツトは変装する必要がない分だけ脱出成功の可能性は高くなるが、ナッティーはヒューロン族にとって危険人物なので確実に殺される。反対に、ガマツトが残る場合、ナッティーの変装が見破られる危険性があるが、ガマツトはヒューロン族から「アンタッチャブルな狂人」だと見なされているので殺される可能性は低い。従って、3人がライオンのような勇敢さでリスクを覚悟しアンカスがクマ、ナッティーがガマツトに変装すれば、最大のリターンが得られるということだ。そして、実際に、アンカスとナッティーは変装を見破られることなく脱出できるし、ガマツトも殺されずに済む。

この変装のプロセスを通じて、いくつかの重要なことが明らかになる。まずは、白人とインディアンの中にカラー・ラインが厳然と存在することである。インディアンは動物に変装することはできても、白人に変装



することはできない。アンカスを救出する作戦を瞬時に練らなければならない限界状況において、インディアンは白人になれないという事実が露見するのだ。反対に、白人がインディアンになれるかどうかという可能性については、クーパーはあまり真剣に考慮していない。ハイワードはチンガチグックにボディーペイントをしてもらうものの、特に言葉の問題からインディアンではなくフランス人のふりをする。また、彼はアリス救出の際に彼女を病気のインディアン女性だと偽って連れ出すが、アリスはインディアンの服に着替えるわけではなく、それにすっぽりと包まれているだけである。小屋に残るガマツもヒューロン族を出来るだけ長く誤魔化すためにアンカスのふりをする必要があるが、彼が服を交換するのはアンカスとではなくナッティーとである。むろん、アンカスの服とナッティーの服の違いは些細なものだろうから、交換する必要がなかったのかもしれないが、ナッティーはそういう細部の見落としこそが荒野では致命的だと繰り返してきただけに、これはナッティーの見落としではなくて、そうする必要がないほど白人とインディアンが異なっているという彼の先入観の表れだと解釈すべきである。

さらに、ナッティーがガマツに変装することによって、それまで一貫して評価してこなかった書物（聖書）を読むふりをしていることにも注目すべきである。ここまで提示してきた読みでまだ説明できていない問題があるとすれば、それは「ナッティーもチンガチグックもアンカスもマグワも等しく共和主義的な生活を送っているのに、なぜアンカスとマグワだけが物語の最後で退場させられるのか」、「なぜマグワは腐敗とは無縁なはずの共和主義的生活を送っているのに腐敗しているのか」という疑問である。（むろん、この文脈では、この両者が異人種混淆の欲望を持っていたからと答えることはできない。）

‘Such old foxes as Chingachgook and myself, are not often caught in a burrow with one hole,’ said Hawk-eye, laughing [. . .]. (64)

「チンガチグックや俺のような熟練のキツネが行き止まりの巣穴に追込まれるなんてことはあまりないな」とホークアイは笑いながら言った。

ここで仄めかされるように、アンカスは「ライオン」の勇敢さに匹敵する「キツネ」の狡猾さを持っていなかった一方で、マグワは彼自身の別名「狡猾なキツネ」に匹敵する「ライオン」の勇敢さを持っていなかった（彼が勇敢であればそのことを讃える別名も持っていたはずである）、彼らは決定的な場面で2つの性質のバランスをとることに失敗したと答えてもよいだろうが、人間が善き市民であるためには、勇敢な「ライオン」と狡猾な「キツネ」を使い分ける実践的知性だけでなく、書物に由来する理論的知性も必要だと作家クーパーは主張したかったのではないだろうか。聖書を読むナッティー、「ジョン」なる洗礼名を持つようになるチンガチグックには理論的知性が備わっているのだ。つまるところ、ナッティーは無教養だからこそアメリカの英雄たり得るのだが、無教養なままではアメリカの英雄ではいられない。ナッティーの教養レベルを巡る作者クーパーのこのジレンマは、独立自営農民のみで構成される共和国という理想を完成させるためにヴァージニア大学を創設した政治家ジェファソンの矛盾と重なる。<sup>7</sup>

ここまで見てきたように、物語のクライマックスで、反ヨーロッパ的なアメリカの共和主義を体現するナッティーはガマットのヨーロッパ人気質の一部を借り受ける。（反対に、平和主義者ガマットはナッティー化し、インディアンを撲殺するようになる。）アメリカの反知性主義者

がアメリカの荒野でヨーロッパの知性に目覚める。<sup>8</sup> その逆説的なプロセスと理由を説明し終えたので、この論考はこれで終わりだが、最後に、今回援用した「アメリカは独立自営農民から成る共和国であって来た」というメタヒストリーについて一言触れておきたい。このメタヒストリーが世界一の経済大国となった現在のアメリカを説明できないのは自明であるが、それでもなお、それが現在のアメリカ人の気質にも刷り込まれていることに注意すべきである。さもなくば、ポピュリズム、国に対する州の優越、都市在住のエリートへの反感、自警団への賛成、銃規制への反対などといった極めてアメリカ的な事象を決して理解できないだろう。

#### 注

この論考は日本アメリカ文学会第58回全国大会での研究発表の原稿を加筆、修正したものである。

- 1 ジョン・P・マクウィリアムズ・ジュニアはクーパーの小説の政治性に注目し、以下のように述べている。

Because Cooper conceived of himself as a defender of American political values, the search for political justice became the dominant concern of his fiction. (5)

クーパーは自身をアメリカの政治的価値観の擁護者だと捉えていたので、政治的正義の探求が彼の小説の主要な関心事になった。

彼はこの観点からクーパーの小説を体系的に論じているが、その際に「政治的深みに欠ける」として『モヒカン族の最後』を研究の対象から外している(13)。本論考がこの解釈に反論するものであることは言うまでもない。

- 2 アメリカ退化論の詳細については、James W. Ceaser, *Reconstructing America*, 1942を参照せよ。この論を唱えたヨーロッパ人の中で最も著名な人物がフランスの博物学者ビュフォン伯爵だった。
- 3 こうしたアマチュアリズムを徹底した人物が共和政ローマの農民キンキンナトゥスCincinnatusだとされる。

司令官ミヌキウスが軍隊とともにアエクウィ人によって包囲攻撃された時、ローマでは彼の軍団が殲滅されるのではないかといたく恐れた。そして、この難局に対する最後の切り札として臨時独裁執政官を立てようと計画した。そこでルキウス・クインクティウス・キンキンナトゥスを選ぶことにした。当時、彼は田園の小さな家に住み、自ら畑仕事をしていた。こうした事情について、ティトゥス・リウィウスは珠玉のような言葉で、彼を次のように称えている。「一切の人間的な雑事を軽蔑し、ただ財産以外には、偉大なことも価値もありえないと考える輩は、よく耳をすませて聴くがよい」と。(『デイスコルシ』580-81)

清貧を体現するキンキンナトゥスは平時には農地を耕し、戦時には

将軍として軍隊を率いたが、彼はアメリカの「建国の父たち」の英雄でもあったので、アメリカ独立戦争の退役将校クラブは彼にちなんで「シンシナティ協会 The Society of Cincinnati」と名付けられた。

- 4 例えば、ベンジャミン・フランクリンが1754年に起草した13の植民地間の連合「オールバニー連合案 The Albany Plan of Union」はインディアンの政体に近似していたとされている。

Franklin chose the name “Grand Council” for the plan’s deliberative body, the same title generally applied to the Iroquois central council. Even the proposed number of delegates, forty-eight, was similar to the Iroquois council’s size of fifty. (Grinde 107)

フランクリンは連合案の審議機関を「大協議会」と名付けたが、通常、「大協議会」とはイロクォイ族の協議会に使われる名称である。議員数案さえも48人と、イロクォイ族の協議会の50人とほぼ同じであった。

- 5 これと同じ趣旨の記述はジャン・ジャック・ルソーの『社会契約論』の中にもある。

マキャヴェルリは、国王たちに教えるようなふうをして、人民に重大な教訓を与えたのである。マキャヴェルリの『君主論』は共和派の宝典である。(103)

- 6 ライオンがアメリカ大陸にいないことについては、グリンデを参照せよ (50)。
- 7 ジェファソンの二重性についての研究は枚挙に暇がないが、好意的なもの代表としてレオ・マークスの*The Machine in the Garden*を挙げておく。

[...] Jefferson also located the weak spot—the place where the theory and the facts were likely to come apart. This did not cause him to repudiate either; rather he kept his hold upon both, using the facts of power to check a proclivity toward wishful thinking, and avoiding the shallows of simple pragmatism by an insistence upon the need for theory—for long-range ideals. In fact, the “doubleness” of Jefferson’s approach toward the pastoral ideal is akin to the basic design of the literary mode. (117)

ジェファソンも弱点を理解していた。弱点とは理論と実践が乖離する可能性のある場所のことである。だからといって、彼は理論と実践を放棄したのではなかった。むしろ、彼は両方に目配りし願望に走りがち傾向を抑えるために実践を用いたり、理論—長期的な理想—の必要性を主張することで、実践あるのみという姿勢の浅薄さを回避したりした。事実、田園主義の理想へのジェファソンのアプローチの「二重性」は文学の基本構図に酷似している。

- 8 この結論はヘンリー・ナッシュ・スミスが『ヴァージン・ランド』の第5章「ダニエル・ブーン：帝国の建設者か原始主義の哲学者か」で指摘しているブーンの二重性についての問いへの回答とも言えるだろう。

If there was a delicious melancholy for sophisticated and literary people in regretting the destruction of the primitive freedom of an untouched continent, the westward movement seemed to less imaginative observers a glorious victory of civilization over savagery and barbarism. (52)

人跡未踏の大陸の原始的自由が破壊されるという嘆きには、洗練された文学者の甘美な憂鬱があったにしても、それほど想像力に富むわけではない人々にとって、西漸運動は野蛮や未開に対する文明の輝かしい勝利のようだった。

ブーンの後継者ナッティーは、アメリカの荒野を擁護する原始主義の哲学を極めればインディアンに同化することになるが、「明白なる天命 Manifest Destiny」という大義名分での文明化推進の先兵役を極めればヨーロッパ人に同化することになる。アメリカ人がインディアンでもヨーロッパ人でもない「アメリカ人」としての独自のアイデンティティーを構築するためには、これら両極の間のいずれかの位置に自らを定めなければならないので、スミスの問いはこれまで繰り返し検討されてきたが、その最新の回答として、チャド・A・バーバーのものを挙げておく。

[. . .] the white frontiersman must perform a precarious balancing act of assimilating those skills necessary to survival in the wilderness (an assimilation characterized as Indianization) with policing and maintaining his whiteness, persevering in the marginal world of the frontier as a white man connected to the “civilized” order [. . .]. (53)

フロンティアの白人は荒野で生き延びるために必要な技術を同化する作業（インディアン化と特徴づけられる同化）と自身の白人性を管理、維持する作業、つまり「文明」の秩序との紐帯を保ち続ける白人としてフロンティアという辺境地帯で耐える作業のバランスをギリギリのところまでとらなければならない。

ナッティーが両極の間のどこに位置しているのかについて、バーバーは特に明確にしていないが、私の共和主義的な回答はナッティーがほぼ完全に原始主義に肩入れしつつも、「首の皮一枚」のところで文明との紐帯を保っているというものである。また、共和主義的な階級の観点ではなく、ジェンダーや人種の観点からフロンティアの二重性を分析しているシャーリー・サミュエルズによると、ナッティーはフロンティアの“a miscegenation between nature and culture”（自然と文明の混淆状態）を隠蔽するために「暴力」を用いているということである（89）。つまり、サミュエルズが呈示するナッティーは「帝国の建設者」としての特徴を比較的多く有するということであろう。



引用文献

- Barbour, Chad A. *From Daniel Boone to Captain America: Playing Indian in American Popular Culture*. Jackson: UP of Mississippi, 2016. Print.
- Ceaser, James W. *Reconstructing America: The Symbol of America in Modern Thought*. New Haven: Yale UP, 1997. Print.
- Cooper, James Fenimore. *The Last of the Mohicans*. 1826. Oxford: Oxford UP, 2008. Print.
- . *The Pioneers*. 1823. Oxford: Oxford UP, 1991. Print.
- Franklin, Wayne. *James Fenimore Cooper: The Early Years*. New Haven: Yale UP, 2007. Print.
- Grinde Jr., Donald A. and Bruce E. Johansen. *Exemplar of Liberty: Native America and the Evolution of Democracy*. Los Angeles: American Indian Studies Center, U of California, 1991. Print.
- Jefferson, Thomas. *Writings*. New York: Library of America, 1984. Print.
- Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America*. 1964. Oxford: Oxford UP, 2000. Print.
- McWilliams Jr., John P. *Political Justice in a Republic: James Fenimore Cooper's America*. Berkeley: U of California P, 1972. Print.
- Pocock, J. G. A. *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*. 1975. Princeton: Princeton UP, 2016. Print.
- Samuels, Shirley. "Generation through Violence: Cooper and the Making of Americans." *New Essays on The Last of Mohicans*. Ed. Daniel Peck. New York: Cambridge UP, 1992. 87-114. Print.

Smith, Henry Nash. *Virgin Land: The American West as Symbol and Myth*. 1950. Cambridge: Harvard UP, 1978. Print.

マキアヴェッリ. 『君主論』. 河島英昭 (訳). 東京: 岩波書店, 1998. Print.

マキアヴェッリ, ニッコロ. 『ディスコルシ 「ローマ史」 論』. 永井三明 (訳). 東京: 筑摩書房, 2011. Print.

ルソー. 『社会契約論』. 桑原武夫, 前川貞次郎 (訳). 東京: 岩波書店, 1954. Print.